


3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 梅雨期の 湿害対策 (共通)</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>梅雨期の湿害対策(共通)</p> <p>デルフィニウムの温度管理・肥培管理・病害防除</p> <p>バラの遮光管理・病害防除</p> <p>シンテッポウユリの水管理・病害防除</p> <p>シクラメンの水管理・肥培管理</p> <p>6月は梅雨期となり、花き栽培では湿害、日照不足により品質の低下や病害の発生が助長されるので、次の対策を講じる。</p> <p>ア 露地花き</p> <p>水田跡地や排水不良なほ場で栽培する場合には高うね栽培とし、ほ場の周辺やうね間の排水溝を整える。</p> <p>降雨による植物体への土砂の跳ね上がりは病害発生の原因となり、定植直後の幼苗では物理的に成育が抑制されるので、農薬により葉裏を中心にていねいに予防散布する。土砂の跳ね上がり対策としてはマルチ栽培も有効な手段となる。また、葉枯病や斑点性病害などの発生が特に懸念される品目では、晴れ間を見て降雨前に薬剤散布を行う。</p> <p>排水対策を施したほ場でも、雨が長期間継続すると土壤水分は飽和状態となり、酸素不足による根の活力や機能が低下し、このことが地上部の成育に悪影響を及ぼす。したがって、直ちに草勢回復や成育促進を図るためには、液肥の葉面散布を根の機能が回復するまで定期的に行うことが有効である。</p> <p>降水量が多いと土壤中の肥料分が流亡するため、追肥するとともに、軽く中耕して土壤中に酸素を供給する。</p> <p>イ 施設花き</p> <p>施設栽培では多雨の直接の悪影響は受けないが、降雨が続くことで施設内の湿度は高くなり、疫病、灰色かび病、べと病、うどんこ病などの発生が多くなるので、暖房機の送風ファンや換気扇の利用により、積極的に換気を行うとともに雨の合間や晴れ間での防除に努める。</p> <p>施設内への雨水の流入を防ぐため、施設周辺の排水溝を整備し、被覆資材の補修等を事前に行う。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) デルフィニウムの施設栽培管理</p>	<p>曇雨天時は、植物体からの蒸散が抑制され養水分の吸収量も少なくなるので、過剰なかん水や施肥はさける。特にかん水は週間天気予報を活用しながら晴れの日々の早朝に行う。</p> <p>日照不足による草勢低下を回復させる場合には、成育状況を見ながら晴天日の午前中や曇天時に薄い液肥を葉面散布するか、かん水代わりに施用する。</p> <p>曇雨天が3～4日続いた後の晴天時の強光線と高温は、品目や成育ステージにより葉焼けが発生する場合があるので、早急に施設内を寒冷紗で遮光し、葉面からの過度の蒸散を抑える。</p> <p>デルフィニウムの成育ステージは終盤を迎え、四番花の出蕾～採花時期になる。</p> <p>6月の気温は、天候の変化に伴いハウス内の気温が急変することが予想され、高温時には品質の劣化が懸念されることから、寒冷紗被覆や積極的な換気等に努め、気温の上昇を抑えることが重要である。</p> <p>また、7月に入っても出荷を行う場合は、施肥管理を引き続き行い、施用量・時期は成育の状況を見ながら行う。施用量、回数共に通常（2週間に1回程度、有機質肥料をチッ素成分量で5～6kg/10a）より削減する。</p> <p>5月に引き続き、うどんこ病の発生が多い時期であるので、今後も定期防除を心がける。なお、梅雨に入ると長雨・曇天が続くため病害の発生が多くなるが、特に灰色かび病は蔓延しやすいので、循環扇等を活用した換気を行う。</p>
<p>(3) パラの施設栽培管理</p>	<p>梅雨入りすると曇天・長雨の影響で花卉や葉もやや軟弱に成育するため、晴天時の強光・高温により花卉や新葉の焼け症が発生しやすい状況となる。したがって、天候の変化には特に注意しながら、適切な遮光管理を行う。</p> <p>また、この時期はうどんこ病や灰色かび病が発生しやすい環</p>



写真1 遮光管理下での四番花の開花状況

項 目	作 業 内 容
<p>(4) シンテッポウユリの露地栽培管理</p>	<p>境となるため、薬剤防除を徹底し、循環扇や暖房機の送風ファンを活用し温室内の湿度低下に努める。</p> <p>6月は成育中期にあたり、この時期は茎の伸長と花芽分化・発達に多くの水分が必要である。予報では曇りや雨の日が多い見込みであり、降雨が続くほ場に滞水すると、酸欠により根腐れをおこすことがあるので、排水対策はしっかり行っておく。</p> <p>また、梅雨期はシンテッポウユリにとって大きな問題となる葉枯病の多発時期となり、切り花品質の著しい低下を招く原因となる。対策としては、発病前より計画的な農薬散布による予防が重要となり、通常は1週間から10日に</p>  <p>一度くらいの散布間隔で実施するが、降雨が続く多発しそうな場合には雨の合間ごとに適宜防除に努める。さらに、防除は降雨前の散布を基本とするため、この時期の天気予報には特に注意する。発病を確認した場合、罹病葉が伝染源となるのでできるだけ早期に除去することを心がける。</p>
<p>(5) シクラメンの鉢物栽培管理</p>	<p>3～4号鉢で仮植育苗中の苗は、6月上旬頃に本葉が15枚程度展開した段階で、仮植時と同じ用土で5号鉢へ定植する。定植後は、用土に乾湿の差をつけた管理をすると、老化を促進し枯れ葉が多く発生するので安定した水分管理を行う。高温多湿となるこの時期から灰色かび病や炭そ病等の病害の発生が多くなるので、頭上散水を避け1鉢ずつ株元に丁寧にかん水する。根張りが充実した後は底面給水管理も可能となる。</p> <p>日中の高温は成育を抑制するため、晴天日は50～70%の遮光資材を展張し施設内温度が30℃を超えないように心がける。</p> <p>肥培管理は5月に準じ、成育が旺盛な時期のため肥料を安定的に効かせ、側芽、葉数を確保する。チッ素濃度が高すぎると主芽の成育が優先され側芽の形成が遅れ、低すぎると成育不良や側芽の少ない株となるので注意する。目安として、葉色はやや薄めで個々の葉が大きくなりすぎない管理が大切である。</p>

(作成 農林水産研究所)